

2013年の

撮影日記

写真やカメラに関する日々雑感

awane-photo.com



もくじ

● 1月	...	2	● 8月	...	74
● 2月	...	13	● 9月	...	81
● 3月	...	22	● 10月	...	89
● 4月	...	27	● 11月	...	99
● 5月	...	41	● 12月	...	103
● 6月	...	50	2014年の撮影日記		
● 7月	...	62		...	111

意表を突いた時間差攻撃！ 「おもちゃ」は所詮「おもちゃ」なのか？



図1-9 とんどに点火する。

TAKARA-TOMY 3D Shot Cam



図1-10 とんどが燃え上がる。

TAKARA-TOMY 3D Shot Cam

⑨全国的には「どんと」とよぶところが多いようだ。

早いもので、もう年が明けてから2週間である。旧暦1月15日(あるいはその前後を含めて)を小正月^{こぎちよう}といい、古くから左義長という火祭りの行事がおこなわれてきた。現在でも、新暦1月15日ころの休日に、とんど^⑨と称して、竹で円錐形の形を組んで正月飾りなどを焼くことがおこなわれている。河川敷や広い田畑があるようなところではかなり大規模なものが組まれているが、住宅地に近いようなところでもそれなりに大きく組みあげられている。そして、人びとが見守るなか、点火(図1-9)。

炎の勢いを、なめていてはいけない。猛烈な勢いで炎が上がり、灰を空高く舞い上げ、舞い上がった灰は遠くへ飛んでいく。もしも、火がついたまま飛んでいったら、「しゃっ、しゃっ、しゃくだ」と怒りながら走った「きかんしゃやえもん」のごとく、たいへんなことになる。だから、そばには消防団の人が待機している。ぱちぱち、ごうごう、ばちん、どかん、ばん。炎の音と竹がはぜる音が繰り返すハーモニー、なかなかにぎやかである(図1-10)。

今日の画像の撮影に使ったものは、タカラトミー「3Dショットカム」だ。立体視のための画像が撮れる、おもちゃなデジタルカメラである。撮影完了の「ピッ」と、データ記録完了の「ピッ」だけを聞き、ただただシャッターレリーズボタンを押していけばよい。とんどが、どれだけにもぎやかな音を発生させても、この「ピッ」は耳元でよく聞こえる。

さて、図1-10をあらためて眺めたところ、少し違和感を覚えた。燃え上がる炎の立体感がどこかおかしい。

ほかの画像もたしかめてみよう。図1-11は違和感なく見えるが、その直後に撮った図1-12には、違和感がある。とくに、神主さんの手が、立体視できない。

画像をよく見くらべてみよう。…なんとしたことか、手の形が違うではないか(図1-13)! 左右の画像は、同時に撮影されたものではなく、時間差があるのだ! 被写体が動いていない場合は、違和感のない自然な立体感の画像が得られるが、被写体が動いていると動いた部分が立体視できなくなっていたのである。

ために、ストップウォッチの表示を撮ってみると、右側の画像は左側の画像の約0.06秒後に記録されていることがわかる(図1-14)。何度か繰り返してみたが、おおむね0.1秒ほど遅れて撮影されているようだ。

これは、まさかの罫である。所詮「おもちゃ」は「おもちゃ」であり、実用的な撮影には不十分な仕様になっていたということだろうか? まあ、動かない被写体であれば、このようなことは問題にならないのだが。なお、機械式のステレオカメラで撮影したときには、左右の画像が撮影されるタイミングについて、気になるようなことはなかった。



図1-11 立体感に違和感はない。



TAKARA-TOMY 3D Shot Cam



図1-12 神主さんの手に違和感がある。



TAKARA-TOMY 3D Shot Cam



図1-13 手の形が違っていている。



TAKARA-TOMY 3D Shot Cam



図1-14 6/100秒のずれがある。



TAKARA-TOMY 3D Shot Cam



図6-4 私のビューティフレックスは、何型のなの？

①朝日ソノラマ「クラシックカメラ専科 No.56」の記事によれば、私のBeautyflexはIV型になる。日本カメラ博物館に展示されていたIII型との相違点を、私が見落としていたのであろう。



図6-5 東京メトロの1日乗車券は、便利である。

まさに、貴重な空間である。特別展も、大いに見ごたえのあるものだった。二眼レフカメラを集めたコーナーには、私が持参したものと同型のビューティフレックスも並んでいる(図6-4)。しかし、その説明には「III型」とある。私のビューティフレックスは「V型」であると、ずっと思いこんでいたので、驚いた。これを「V型」と思いこんでいた理由は、アサヒカメラ1954年9月号の広告で、Beautyflex Vの特徴に「シンクロターミナル」が含まれていたからである。しかし、あらためてよく見れば「コンパタイプ」とある。コンパタイプのシンクロ接点とあらためて聞くとなんのことがピンとこないかもしれないが、要は、一般的なふつうのシンクロ接点だと思えばよい。ところが、私のビューティフレックスのシンクロ接点は、「コダック式」なのである。私がずっと、間違ったことを思いこんでいたようだ①。

そうだ、日本カメラ博物館の説明は、信用なるものなのだ。インターネットオークションの出品などでは、カメラについて明らかに内容が誤っていることや、どこかのWebサイトから盗用したような説明がされているものを見かけることがある。そんな説明をしている販売店や出品者は、やはり信用したくないし、取り引きをしたくない。そう感じている人も、少なくないと思う。

日本カメラ博物館の「よいところ」は、説明内容が信用できることだけではない。販売店などちがって「値札がついていない」ので、精神衛生的にも好都合なのである。なお、「科博」から「カ博」への移動など、都内の移動には東京メトロの1日乗車券が便利であった(図6-5)。

2013年06月10日(月) 天気：くもり

**ビューティフレックスよ、
ここがキミの故郷らしいぞ。**

先週は、「中判写真週間」であった。中判写真のフォーマット、6×4.5、6×6、6×7、6×8、6×9にあわせて、6月4日から6月9日の期間を中判写真を楽しむ日として、勝手に制定したものである。このような「記念日」を決めておけば、フィルムを使って写真を撮る楽しさを誰もが決して忘れなくなるだろう。それだけでなく、あらたにフィルムを使って写真を撮ろうと思う人があらわれるきっかけにもなるだろう。

これまでにご協力いただいた方々には厚く御礼申しあげるとともに、今後もよろしくお願い申しあげたい。

さて、今年の中判写真週間では、ビューティフレックスという国産の廉価版二眼レフカメラを使うことにした。ビューティフレックスを製造した太陽堂光機(ビューティーカメラ)の母体ともいえる老舗の販売店、「カメラ太陽堂」が今月末で閉店することになったためである(→p.49)。

「カメラ太陽堂」を訪れることができたのは、6月1日のこと。地下鉄の神田神保町駅から地上にあがれば、「カメラ太陽堂」はすぐそこだ。私の場合、たまたま手もとにビューティフレックスがあるというだけの縁で、「カメラ太陽堂」の顧客だったわけではない。かつて、「新世界レコード社」を訪れるために神田神保町駅を利用したことはあるが、「カメラ太陽堂」については記憶がない。要は、「カメラ太陽堂」を利用したことはないのである。そして、訪れた日はまだ開店前だったのか、シャッターは開いていない。こんど東京を訪れる予定があるのは、来月になってからのことだ。もしかすると最後まで、営業中の「カメラ太陽堂」を見ることはないのかもしれない(図6-6)。

せっかく「カメラ太陽堂」を訪れたのだから、ビューティフレックス^②でも撮ってみよう。フィルムは、NEOPAN 100 ACROSを使用。この日はよく晴れており、シャッター速度は1/100秒、絞りはF11くらいにしておけばほぼ適正露出になるはずだ。ギアの噛みあわせがよくない部分があり、そこを無理に動かすと連動がずれてしまうので(ずれても元にもどせるように印をつけてあるが)、いまひとつスムーズなピントあわせができないのは残念である。

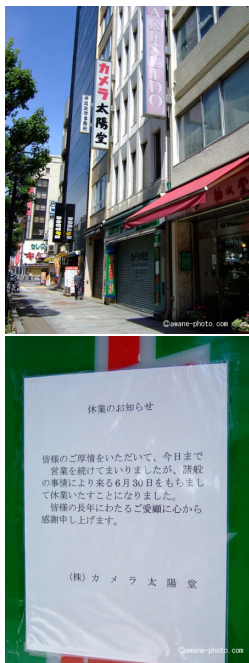


図6-6 「カメラ太陽堂」の建物と、閉店を告げる貼り紙。

②このときにはBeautyflex III型と思いこんでいる(→p.50)が、朝日ソノラマ「クラシックカメラ専科 No.56」の記事によれば、このときのBeautyflexはIV型である。



図6-7 「カメラ太陽堂」の店を太陽堂光機のカメラで撮る。

BEAUTYFLEX IV, Doimar 8cm F3.5, NEOPAN 100 ACROS



図6-8 ビューティフレックスよ、ここがキミの故郷らしいぞ。

私は二眼レフカメラを使うときは、ストラップで首からかけるようにする。そして、カメラをもって、ストラップをピンと張る。そうすれば、カメラブレを起こしにくい。ただし、ピントをあわせるときと、実際に露光するときとでカメラの位置が異なることになる、ピントが微妙にずれることが懸念されるが、まあ、この条件での撮影ならばほどほどに絞こまれているのだから、気にする必要はない(図6-7)。

太陽堂光機の工場は神田神保町ではなく、板橋区志村にあった。だから、このビューティフレックスが生まれたのは、千代田区のここではない。だが、せっかくだからこういうフレーズを使ってみたい(図6-8)。

ビューティフレックスよ、ここがキミの故郷らしいぞ。

このビューティフレックスは幸いにも、シャッターがスムーズに動作する。レンズにも、明らかなダメージは見られない。ピントについても、だいたい調整した。だから、写真を撮る道具としては、じゅうぶんに使えるものなのである。中判写真週間の間ずっと携帯していたのだが、なかなか写真を撮る時間を見出すことはできず、「カメラ太陽堂」を撮ったときのものを含めて、フィルムを2本消費するのがせいっぱいだったのは残念である。図6-9は栃木県佐野市の道の駅「どまんなか たぬま」の近くで撮影したもの。ここは、富士山の眺望にすぐれた場所とのことだが、当日の空はかすんでいた。



図6-9 夕日に光る田

BEAUTYFLEX IV, Doimar 8cm F3.5, NEOPAN 100 ACROS

「パノラマ写真の日」には、Nikon F70Dを見直すことになった(→p.176)。ニコンの一眼レフカメラで「パノラマモード」のあるものは、F50D、F60D、F70Dの3機種しかなく、このうちF50DとF60Dはいわゆるエントリーモデルで、機能的に制約が大きい。それに対しF70Dは中級モデルであり、マニュアルフォーカスレンズでも露出計が使えるたり、AF-Sレンズでオートフォーカス撮影ができるなど、機能が充実している。言いかえれば、Nikon F70Dはパノラマモードのあるニコンの一眼レフカメラのなかで、もっとも多機能なものである。なお、これ以降のニコンの一眼レフカメラにはパノラマモードが搭載されなくなり、エントリーモデルのNikon UでもAF-Sレンズに対応したり、中級モデルのF80D、F80Sでもマニュアルフォーカスレンズで露出計が使えるようになるなど、事情は変化していく。

パノラマモードはこの時代の流行だったようで、当然ながらニコン以外の一眼レフカメラにもパノラマモードが用意されている(→p.182, 表7-1)。日本カメラショー「カメラ総合カタログ」では、必ずしもパノラマモードの有無が記載されているとは限らないため、この表には漏れが含まれているかもしれないので、お気づきの方はお知らせいただきたい。それは、パノラマモードがそれほどセールスポイントにならなかったのではないかと、いうことを物語っているとも言える。また、上位モデルにはあまり搭載されず、そして2000年代に入ると一眼レフカメラの新製品にパノラマモードが搭載されなくなっていく。1990年代後半だけに見られた、まさに一過性の流行だったわけだ。

ところで、最初にパノラマモードを搭載したカメラは、いつ、どこから発売されたのだろうか？

日本カメラショー「カメラ総合カタログ」を参照すれば、「世界初のパノラマモード搭載」などと称する製品がすぐに見つかるだろうと思った。しかし、世の中はそんなに単純なものではないようだ。機能があっても大きく扱っていないものもあり、1つ1つの製品の説明などを読まないと判別できない。ともあれ、説明文において最初に「パノラマモード」の記述がなされたカメラは、どうやらvol.98(1990年)に掲載されているフジ「HD-Pパノラマ」のようである(図7-1)。



図 7-1 日本カメラショー「カメラ総合カタログ」vol.98の フジHD-Pパノラマには、「狙ったシーンをワイドに伝えるパノラマモード撮影と標準モード撮影が両方楽しめる…」との説明がある。

表7-1 パノラマモードのある一眼レフカメラ

年(vol.)	キヤノン	ミノルタ	ペンタックス	ニコン	オリンパス
1992 (vol.105)	EOS1000Sパノラマ				
1993 (vol.106)	EOS1000Sパノラマ	α-7xiパノラマ α-5xiパノラマ α-3xiパノラマ			
1994 (vol.108)	EOS100パノラマ EOS kiss	α-7xiパノラマ α-5xiパノラマ α-3xiパノラマ α-707si α-303si	Z-20P Z-50P	F50Dパノラマ	
1995 (vol.110)	EOS100パノラマ EOS kiss	α-5xiパノラマ α-3xiパノラマ α-707si α-507si α-303si	Z-20P Z-50P	F70Dパノラマ F50Dパノラマ	L-10パノラマ
1996 (vol.111)	EOS55 EOS kiss	α-707si α-507si α-303si super α-303si α-101si	MZ-5 Z-70P	F70Dパノラマ F50Dパノラマ	L-10スーパー
1997 (vol.113)	EOS55 NEW EOS kiss EOS kiss	α-707si α-507si α-303si super α-303si α-101si	MZ-5 MZ-10	F70Dパノラマ F50Dパノラマ	L-10スーパー
1998 (vol.114)	EOS55 NEW EOS kiss EOS kiss	α-807si α-507si α-Sweet α-Sweet S α-303si α-101si	MZ-3 MZ-5 MZ-10	F70Dパノラマ F60Dパノラマ	L-20 L-30
2000 (vol.116)	EOS55 EOS kiss III NEW EOS kiss	α-807si α-Sweet α-Sweet S α-360si	MZ-3 MZ-5 MZ-7 MZ-10	F60Dパノラマ	L-20 L-30
2001 (vol.117)	EOS55 EOS kiss III NEW EOS kiss	α-807si α-Sweet α-Sweet S α-360si	MZ-3 MZ-5N MZ-7 MZ-10		L-30
2002 (vol.118)	EOS55 EOS kiss IIIL NEW EOS kiss	α-807si α-Sweet II α-Sweet α-Sweet S α-360si	MZ-3 MZ-5N		L-30
2003 (vol.119)	EOS kiss IIIL	α-Sweet II	MZ-3 MZ-5N		L-30
2004 (vol.120)			MZ-3		
2005 (vol.121)			MZ-3		

日本カメラショー「カメラ総合カタログ」に掲載された一眼レフカメラカメラのうち、パノラマモードをもつことが明記されているものをまとめている。

しかし、その前年版(vol.94, 1989年)に掲載されているコニカ「現場監督」には、「パノラマモード」こそないものの、ファインダーにパノラマ撮影に便利なマークが入っているという記述がある(図7-2)。このことから、カメラに「パノラマモード」が設けられるよりも先に、D.P.E.サービスにおいて「パノラマプリント」が用意されるようになったことがうかがえる。このあたりの経緯は、たとえば富士フィルムのWebサイト等を参照しても明確な情報が見あたらない。

「写真用品&映像ショー」のカタログでは、1989年版(No.19-II)にはパノラマ判に対応したポケットアルバムやフレームの記載は見つからないが、1990年版(No.20)ではパノラマ判用フレームが、KING(浅沼商会)とコニカから発売されているのが見つかる(図7-3)。だから、このころにパノラマ判のプリントサービスがはじまったと思われるが、それを直接に示す記載等は見あたらない。

ひっそりと登場したパノラマモードは、1991年に突然、目立ち始める。この年に発売されたオリンパス「IZM220 パノラマズーム クォーツデット」は、「世界初となるパノラマ切替機能を搭載したカメラ」を謳っていた(図7-4)。

「パノラマ切替機能」とは、1本のフィルムを使用しているときに、あるコマは通常のライカ判で、あるコマは天地をマスクしたパノラマ判で撮影できるようになる、という機能である。OLYMPUS IZM220は、これをレバー操作だけで簡単にできるようにした。これ以前のカメラでは、1本のフィルムでライカ判とパノラマ判とを切りかえることができなかった、ということである。実際に「パノラマモード」があると謳いながらも、付属のあるいは別売のパノラマアダプタをはめこんで使うようなものも多く存在した。また、レバーで切りかえるようになっているものであっても、裏蓋を開けてフィルムを装填するときに切りかえをおこなわなければならないようになっていた。このほか、1990年4月にはフジ「写ルンですパノラミックHi」が発売され、ミノルタ「P's」やフジ「パノラマカルディア」などのような、パノラマモード専用のカメラも発売された。

APSの登場時が、パノラマモードの最盛期だったかもしれない。その後、APSフィルムの販売終了とともに、パノラマモードは忘却の彼方へと旅立っていった。なお、最後の35mmコンパクトカメラと思われるGOKO MacromaX MAC-10 Z3200(→p.180)には、パノラマモードはない。



図 7-2 日本カメラショー「カメラ総合カタログ」vol.94のコニカ「現場監督」には、「…パノラマ撮影を容易にするパノラママーク入りファインダーの採用など…」との説明がある。



図7-3 「写真用品&映像ショーカタログ」No.20(1990年)ではパノラマ判用フレームがKING(上:ノビオパノラマフォトスタンド)とコニカ(下:木製額縁 家族)から発売されている。



図 7-4 日本カメラショー「カメラ総合カタログ」vol.103 (1992年)のオリンパスIZM220では、「世界初，“標準”と“パノラマ”がワンタッチで途中切り替え可能。ファインダーも連動して切り替わるので、…」との説明がある。

Nikon New FM2がやってきた



図7-5 New FM2とズームレンズのセットをいただいた。



図7-6 仕事用の道具として、かなり使いこまれている。

いつもお世話になっているラボの方から、Nikon New FM2とズームレンズAi Zoom-NIKKOR 35-105mm F3.5-4.5Sをいただいた(図7-5)。このカメラとレンズは、学校の卒業アルバムなどの仕事で使われていたものとのこと。持ち主だった人は、デジタルカメラで仕事をするようになって、使わなくなったものとのことである。角の塗装が剥けている点はずいぶん使いこまれたことをうかがわせるし、ところどころ表面に錆が出ている点は、使われなくなってからある程度の期間が過ぎていることをうかがわせる(図7-6)。しかし、シャッター等の動作はなめらかであり、重要な仕事の道具として、手入れが怠っていなかったものと思われる。

Nikon New FM2は、機械式制御のマニュアル式一眼レフカメラである。その最大のセールスポイントは、フラッシュ撮影時に1/250秒のシャッター速度が使えることと、シャッター速度の最高速が1/4000秒であることだった。

New FM2という名称からわかるように、「New」ではないFM2や、「2」のつかないFMも存在した。このシリーズのカメラは、機械式制御の縦走りフォーカルプレキシッターを搭載している。1977年に発売されたNikon FMでは、シャッター速度の最高速は1/1000秒、フラッシュ撮影時の最高速は1/125秒である。1982年にはNikon FM2が発売され、シャッター幕の走行速度を速めてフラッシュ撮影時の最高速を1/200秒とし、あわせてシャッター速度の最高速度が1/4000秒になったものである。Nikon New FM2はそれをさらに改良したもので、1984年に発売された。そして、2001年にNikon FM3Aが発売されるまでカタログに掲載されつづけた、ロングセラーモデルとなったものである。

Nikon FM, Nikon FM2, Nikon New FM2は、裏蓋のデータバックやモータードライブが共用できるなど、ボディはほぼ同じサイズである。また、シャッター速度ダイヤルなどの操作系の配置もほぼ共通しているため、外見はどれもよく似ている。私は長く、Nikon FMを愛用してきたから、このたびいただいたNikon New FM2にもすぐになじめるかと思ったが、実際に使ってみると使い勝手がかなり異なる。いや、その差は微妙なのだが、微妙だからこそ迷ってしまう場面がある(図7-7)。



図7-7 Nikon FMとNikon New FM2は、よく似ているように見えるわけだが…

全国水産物商業協同組合連合会は、毎月10日を「魚の日」としている。これは、魚のことを「とと」とよぶこともあることにもとづいた、語呂あわせだ。

先月から、「魚眼レンズの日」を決めようと、いろいろと考えたり、提案を募ったりしてきた(→p.204)。いただいた提案等は、表10-1のとおりであった(→p.206)。

語呂あわせや意味づけのほかに、少し戦略的なことも考えていた。これまでも「中判写真真週間」や「バイテンの日」など、「写真を撮ることを促す」ためのいろいろな記念日を勝手に提唱してきたが、そういう記念日の少ない9月から10月にかけての時期が好都合だ。また、提唱してすぐに、該当の日が訪れると盛り上がりやすいのではないだろうか。だから、10月に設定したいと、ひそかに考えていた。

そんなときにいただいたご提案が、「10月10日」だった。ひとつは「魚眼レンズ」だから「魚」に関連し、全国水産物商業協同組合連合会が提唱する「魚(とと)の日」を利用して「10日」にしようというもの。さらに、「魚眼レンズは世界が丸く写る」ことから「○」がたくさんある日として「10月10日」はどうか、という意味づけがされていた。

ともかく、「魚眼レンズの日」は、「10月10日」に決定することにした。いろいろなご意見をくださったみなさまには、厚く御礼申しあげたい。なお、「魚眼レンズの日」は、フィルムでの撮影に限定しない。デジタルカメラでもビデオカメラでも、なんでもけっこう！とにかく「魚眼レンズ」を使ってみようではないか。フィルムでの撮影を促すために思いついた「○○の日」であるが、なかにはフィルムに限定しない、こういう日があってもいいじゃないか。

ただ、これだけ勝手に騒いでおきながら、私はまともな魚眼レンズをもっていない。いま、私の手元にある「魚眼レンズ」風の撮影ができるもので、もっともちゃんとした画像が得られそうなのは、ニコン「おもしろレンズ工房」に含まれる「ぎょぎょっと20」である。これはピント調整が固定されており、絞りもF8に固定されており、写る範囲も180°より狭い^①ものであるが、周辺まできっちりした像を結んでくれるレンズである。「おもちゃ」的なレンズでありながら、つくりがしっかりしている点にも、好感を抱ける。

表10-1 「魚眼レンズの日」提唱へのご提案

「魚」からの発想	「180°」からの発想
うお座の初日(2/19)	1月8日
「魚の日」(毎月10日)	毎月18日
	1年の180日目 (6/28, 6/29)
	昼夜半分の春分・秋分

①約160°



図10-1 道頓堀川

Nikon New FM2, AMUSING LENSES Fish-eye Type 20mm F8, ACROS



Nikon New FM2, SIGMA AF 14mm F3.5, ACROS



Nikon New FM2, AMUSING LENSES Fish-eye Type 20mm F8, ACROS

図10-2 横川新橋

それでは実際に、撮ってみよう。

ほぼ真横にある巨大な看板も、すっぽりと写しこまれている(図10-1)。直線状のビルがぐにやりと曲がって写るのがいかにも魚眼レンズで嫌味でもあるのだが、通常の超広角レンズと違って、遠近感が誇張されて散漫な印象になってしまうことがおさえられない点は、うまく利用したいところである。

そのためには、画面の周辺に直線状のものを写しこまなければよさそうだ。

図10-2では、上が通常の超広角レンズ(SIGMA AF 14mm F3.5)で撮ったもの、下が、魚眼レンズ(ぎょぎょっと20)で撮ったものである。こういう構図なら、魚眼レンズでも違和感がない。魚眼レンズのほうが、遠近感がおさえられ気味で、むしろ自然に見える。

さあ、「魚眼レンズ」をもっている人は、こんどの10月10日にはぜひ持ち出して使ってみよう！この日に使うレンズは「魚眼レンズ」1本だけに、という「魚眼レンズ縛り」にチャレンジするのもおもしろそうだと思うないか！

とくに、「魚眼レンズ」をもっているが、最近まったく使っていないなあ、という人には必ず、「魚眼レンズの日」を実施していただきたい。

きっと、ものを見る目が変わることだろう。

2014年10月04日(土) 天気：雨

レンズボードを忘れちゃいけない

「魚眼レンズの日」を勝手に制定しよう、と考えたのは、先月のことだった。そして、いろいろなご意見をいただき、「魚眼レンズの日」を「10月10日」に決めたのは、つい3日前のことである。「魚眼レンズの日」には「魚眼レンズだけで撮影を楽しもう」という企画であるが、残念なことに平日である。10月ともなれば日の出も遅く、日の入りも早い。撮影をする時間がじゅうぶんには確保できそうにない。夜景を撮るということも考えられるが、まだイルミネーションの時期には早く、三脚が必要となれば荷物も大げさになる。

趣旨から少しはずれてしまうことになるが、「魚眼レンズの日」も含めて、それ以前から少しずつ「魚眼レンズ」での撮影をやってみることにした。

「魚眼レンズ」(「魚眼レンズ風のレンズ」も含む)で撮影すると、被写体が強烈に湾曲して写る。魚眼レンズならではのおもしろさであるが、やりすぎると鼻につく。一方、画面の周辺部に直線状のものがなければ湾曲もあまり気にならず、遠景を撮る場合はかえって自然な感じに見えることもある。そこで、湾曲が気にならない被写体としてテングシデ(図10-3)を撮りに行くことにしたのは先週末のことだ。

久しぶりに訪れたのは、雨が降りそうな早朝であった。

天然記念物に指定されており、町の観光情報サイトでも取り上げられているにもかかわらず、道路の案内標識は不親切極まりないので、ロクに下調べをせず訪れようとすれば、道に迷うことは必至である。広島市内方面からだと、国道261号線を走れば、「大朝インター前」交差点に到達する。国道261号線はそこで右折するのだが、そのまますすぐ県道5号線を「浜田」方面に進む。しばらく行って、県道79号線と交わる「わさ大橋」交差点を「芸北」方面に左折する。その交差点(左向こうに「わさ〜る」産直館がある)の手前に、「天然記念物 天狗シデ」は左折するという案内標識が、いまひとつ目立たない位置にあるので注意が必要。

目立たない位置にあるとはいえ、その案内標識はまだ親切なほうだ。

「わさ大橋」を左折してしばらく進むと信号のない交差点があり、直進は「国道186号 芸北」、左折は「豊平」、右折は「大朝市街」とある。ここでは、「豊平」方面へ左折するのが正解である。左折すれば右側の低い位置に、「田原温泉」と「天狗シデ 6700m」という看板が見えるはずだ。この「天狗シデ」への案内標識は、ぜひとも交差点の手前にほしい。交差点では、背の高い「ユートピアサイオト」や、きれいな「中国平和記念墓地公園」の案内標識はよく目立つ。その手間に「田原温泉」への案内標識もあるが、これは劣化してやや読みにくい。だが、「天狗シデ」への案内標識は、交差点の手前からは見えないのである。

まあ、あんまり多くの人に訪れてほしくないという方針があるなら、それもしかたないか。

ともあれ予定通り、テングシデを「ぎょぎょっと20」で撮影する。三脚を立てているうちに、雨が降りはじめた。



図10-3 テングシデ

イヌシデの突然変異によって生じたもので、幹や枝が激しく屈曲した姿がおもしろい樹である。広島県山県郡北広島町大朝には多数の「テングシデ」が生えた場所があり、「大朝のテングシデ群落」として天然記念物に指定されている。(2005年10月16日撮影)

Mamiya Universal Press, Mamiya-sekor
50mm F6.3, E100G